

詩編 32 : 1~2

ヘブライ人への手紙 2 : 14~18

「まことの神であり、まことの人」

(ハイデルベルク信仰問答 問 35~36) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【前奏】

【招詞】 テトスへの手紙 2 : 11

【祈祷】

【聖書】 イザヤ書 61 : 1、ローマの信徒への手紙 8 : 14~17

【説教】 「まことの神であり、まことの人」

<まことの神であり、まことの人>

今日、み言葉に聞く信仰のことがらは、イエスさまという方が、まことの神であり、まことの人である、ということです。

まことの神であり、まことの人である。イエスさまは、お一人の人格において、神の本性と、人の本性をもっておられる。これは、キリスト教の信仰の要となる教理です。

イエスさまが、まことの神であり、まことの人であるということは、聖書が指し示しています。それは、イエスさまのご降誕の場面に、特によく表わされています。

聖書によれば、イエスさまは聖霊によって、まだヨセフと結婚をする前の、処女マリアの胎に宿られました。そしてイエスさまは、わたしたち人間と同じように、母マリアのお腹から、一人の赤ちゃんとして、おぎゃあと言ってお生まれになりました。

聖霊のお働きによって、胎に宿られた。これが、イエスさまがまことの神の子であることを示しています。また、一人の人間の女性である母マリアから、わたしたちと同じようにお生まれになった。これが、イエスさまがまことの人となられたことを指し示しています。

わたしたちが毎週告白している、教会の信仰の箇条、「使徒信条」には、イエスさまについて「主は聖霊によって宿り、処女マリヤより生まれ」と告白している文章があります。

この告白は、まさに、このようにお生まれになったイエスさまというお方は、まことの神であり、まことの人である、ということ信じ、告白しているのです。

<出来事の意味>

今日の『ハイデルベルク信仰問答』の問 35~36 は、この信仰のことについて教えています。問 35 を読んでみます。

「問 35『主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生まれ』とは、どういう意味ですか。」

「答 永遠の神の御子、すなわち、まことの永遠の神であり、またあり続けるお方が、聖霊の働きによって、処女マリヤの肉と血とから、まことの人間性をお取りになった、ということです。」答えは、ひとまずここで区切ります。

このイエスさまのご降誕は、一般的に「処女降誕」と言われる教理です。

基本的に、このような出来事は、わたしたちの常識では、あり得ないことです。

ですから、処女が子を宿すことがあり得るのかどうか。どうやったら合理的に説明できるか。そのことを追及して、この奇跡の御業を解き明かして、何とか納得したいという人々が、これまで様々な説を考えてきました。

しかし、そのようなことを論じることは、信仰においてまったく意味がありません。

何か説明を無理やりくっつけたとして、「それならあり得るかな」と納得する。それは、信仰でもなんでもありません。それは理屈に納得しただけであって、「信じる」とは言わないのです。

それに、この世の中のことで説明がつく出来事であるなら、それは神さまの御力など、必要ないのではないのでしょうか。人間にできる範囲内の、人間の理解の範囲内の、この世であり得る範囲内の出来事。わたしたちが信じる神さまは、そんなわたしたち人間の範囲内のことをするだけの神さまなのではないのでしょうか。それなら、それは別に神さまでなくても、良いのではないのでしょうか…。

処女降誕が、あったか、なかったか。あり得るか、あり得ないか。それが問題なのではないのです。神さまは、わたしたちをお救いになるために、そのような方法をとられた。そう聖書は伝えているのです。

これは、神さまがなされた、わたしたちの救いのためになされた、神の御業です。

そうであるならば、ここで問うべきは、なぜ、イエスさまはそのようにお生まれにならなければならなかったのか。何のために、まことの永遠の神の御子が、肉と血からまことの人間性をお取りになったのか。そのことによって、何がもたらされたのか、ということです。

それを知ることこそが、わたしたちの信仰にとって、大切なことなのです。

<わたしたちの益のため>

ですから、『ハイデルベルク信仰問答』の間 36 はこのように問うています。

「問 36 キリストの聖なる受胎と誕生によって、あなたがたほどのような益を受けますか。」

この問いは、「キリストの聖なる受胎と誕生」、つまり、イエスさまが、聖霊によってやどり、処女マリヤよりお生まれになられたことで、イエスさまが、まことの神であり、まことの人であられることで、このわたしたち人間が受ける益がある。わたしたちに、与えられる恵みがある。そう言っているのです。

つまり、イエスさまは、わたしたちに益を受けさせるためにこそ、まことの永遠の神でありながら、まことの人間性を取ってお生まれになった、ということなのです。

<仲保者>

では、そのことによって、わたしたちが受ける益とは何か。問 36 の答えを見てみます。

「答 この方がわたしたちの仲保者であられ、御自身の無罪性と完全なきよさとによって、罪のうちにはらまれたわたしのその罪を、神の御顔の前で覆ってくださる、ということです。」

まず、「この方がわたしたちの仲保者であられ」、とあるように。イエスさまが、まことの神でありながら、まことの人となって下さったのは、わたしたちの「仲保者」であられるためです。仲保者とは、両者の仲を取り持ち、保つ者です。

イエスさまは、父なる神さまとわたしたちの間に立って下さり、仲保者となって下さるために、まことの神の御子でありながら、まことの人となって下さったのです。

わたしたちすべての人間には、仲保者が必要でした。わたしたちは罪によって、神さまとの関係が断絶してしまっていたからです。

本来、神さまは、わたしたちの存在を、心から愛し、応答し、共に生き、共に喜ぶ存在として、造って下さいました。

しかしわたしたちは、神さまの御許から離れることを望み、神さまの御心よりも、自分の思いに従い、神さまを主人とせず、自分を人生の主人として、歩んでいたのです。それが、すべての人間が捕らわれている「罪」です。

その罪のために、わたしたちは自ら、神さまから離れ、神さまと愛し合う関係、神さまと応答し合う恵みの関係を、壊してしまったのです。

わたしたち人間は、この、神さまに対して犯した自分の罪を、もはや自分で償うことは出来ません。この罪はあまりにも深刻で、重すぎて、自分の命を差し出しても、この罪の負債をお返しすることは出来ないほどのものになっているのです。

わたしたちは、この自分の罪のために、さばきを受けて、滅びるしかない者でした。

しかし神さまは、背いたわたしたちを、それでも憐れみ、愛し続けて下さいました。わたしたちが罪に滅びないで、生きること。神さまの御許に立ち帰ること。それを、心から望んで下さいました。だからこそ、神さまは、わたしたちの罪を解決するために、御自分の独り子であるイエスさまを、この世に遣わして下さいました。

イエスさまは、わたしたちの罪の負債を肩代わりして、すべて支い、完全に償って下さるために、神さまとわたしたちの間に立って、壊れてしまった関係を回復させて下さるために。そのようにして仲保者となるために。まことの人となって、この世に来て下さったのです。

<無罪性と完全なきよさ>

人間の罪は、人間自身が償わなければなりません。しかも、一人の人間が、他の人間の罪を償うのなら、それは「罪のない人間」でなければなりません。

自分も罪の負債を返さなければならない者が、自分の罪の分も支払うことが出来ないのに、他人の罪の分まで支払って償うことは不可能だからです。

それゆえに、神と人との仲保者となる者、すべての人間の罪を償う者は、「罪のないまことの人間」でなければなりませんでした。

だからこそ、神さまに完全に従順に従うことのできる、罪を犯されることのない神の御子が、肉と血をとり、「罪のないまことの人間」となられたのです。

そうして、イエスさまという人間における「無罪性と完全なきよさ」によって、わたしたちすべての人間の罪は担われたのです。

そしてまた、このように滅びに向かうすべての人間の罪を担い、罪の赦しと復活の命を与えることは、神の御子にしかできないことなのです。

だから、イエスさまは、わたしたちの罪を贖って、仲保者となるために、まことの永遠の神でありながら、まことの人間性をお取りになって、聖霊によってやどり、処女マリヤからお生まれになったのです。

<わたしたちと同じように>

今日、読まれたヘブライ人への手紙には、次のようにありました。2:17~18をお読みします。「それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです。」

今日の間 35 の答えの最後の方は、ここの 17 節の御言葉が引用されています。こうありました。「それは、御自身もまたダビデのまことの子孫となり、罪を別にしては、すべての点で兄弟たちと同じようになるためでした。」

ところでここに、「御自身もまたダビデのまことの子孫となり」とあります。

イエスさまは、聖霊によって宿られました。ダビデの子孫であるヨセフを夫として迎えるマリヤからお生まれになることで、御自身、ダビデの子孫として、その人間の系図の中に身を置かれました。

それは、このわたしたち人間が生きるこの世界の中に、このわたしたち人間の歴史の只中に、イエスさまが確かに一人の人間として、お立ちになったということです。

そしてこれは、旧約聖書において、神さまが約束されていた、イスラエルの民の、ダビデの裔からメシア、救い主が現れる、という御言葉の実現に他なりませんでした。

神の独り子イエスさまは、そのようにして、ダビデの子孫として、一人のユダヤ人として、まことの人となり、神さまの救いを実現するために、この世にお生まれになり、「罪を別にしては、すべての点で兄弟たちと同じように」なられたのです。

<助けることがおできになる>

このことは、わたしたちにとって深い、深い、慰めです。

なぜなら、わたしたち人間にとって、本来、神という存在は、あまりに聖く、あまりに偉大で、あまりに栄光に輝いており、罪に陥り、汚れているわたしたちにとっては、まったく近づくことが出来ないお方であるはずなのです。

しかし、神の独り子イエスさまは、自らわたしたちの許に降って来られました。この神と人との隔たりを、御自分から超えてきて下さり、ご自分の栄光を捨てて、神の身分を捨てて、わたしたちと同じ人となって下さったのです。そのようにして、イエスさまの方から、わたしたちに近づき、わたしたちと共にいて、わたしたちを助け、慰め、救って下さるのです。

また、まことの人となられたイエスさまは、人間が経験する、あらゆる試練、苦しみ、悩み、痛みを、ご自身もその身をもって、経験なさいました。

ヘブライ人への手紙の 2：18 ではこう語られています。「事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです。」

わたしたちの体の痛みも、心の苦しみも、悪魔の誘惑も、人に裏切られる悲しみも、愛する者を失う嘆きも、独りで苦難に耐える孤独も、そして神さまから見捨てられると感じるような絶望も、わたしたちと同じになられたイエスさまは、すべてご存知です。

さらに、イエスさまは、わたしたち人間が決して耐えることのできない、神さまの怒り、さばき、そして滅びの死さえ、ご自身の身に受け入れられたのです。

わたしたちが人生で覚える苦しみの中で、悲しみの中で、罪の悲惨の中で、イエスさまがご存知ないことは何一つありません。わたしたち以上に、イエスさまは苦しみを、悲惨を、痛みを、ご存知であります。

そしてイエスさまは、おそらく、わたしたち自身よりも、わたしたちの根底にある悩みや、深い苦しみ、自分でも気づいていない罪や悪を、ご存知なのです。

そのようなイエスさまが、共にいて下さるのです。しかもそれは、ただ傍らに来て、横に立って、同情して下さるといっただけではありません。

この方は、わたしたちの苦しみも、罪も、死も、滅びも、すべてを担い、すべてを引き取って下さるために来られたのです。

わたしたちは、このまことの人となられたイエスさまに、わたしという人間の罪を、わたしの汚れを、わたしの弱さを、わたしの苦難と死を、すべて渡してよい、と言われていました。

しかも、すべてを渡してしまった後には、神の独り子であるイエスさまがお持ちであった永遠の命と、復活と、神の子の身分を、このわたしに与えて下さるといっただけです。

まことの人となられたからこそ、イエスさまは、このわたしたちの試練を、苦しみを、罪を、死を、悲惨さを、すべてご存知であります。また、まことの神であられるからこそ、イエスさまは、わたしたちのすべてを担い、救って下さることがお出来になります。

わたしたちは、これからどのような道を歩もうとも、必ずそれは、すでにイエスさまが先立って歩まれた道であると知らされています。どんな悲惨の果てのようなところであっても、イエスさまは、そこにもわたしたちと共におられると、教えられています。

そしてこのお方は、わたしたちの救い主であられますから、必ずわたしたちを担って下さり、助けて下さり、慰めて下さり、救って下さる。そのことを、確信をもって、信じてよいのです。この方にこそ、すべてを頼り、寄り縋ってよいのです。

わたしたちが、このような恵みを受けるために。このような益を受けるために。イエスさまは、「聖霊によってやどり、処女マリヤから生まれ」られたのです。

わたしたちの救い主、わたしたちの仲保者となられるために、イエスさまは、まことの神でありながら、まことの人となられたのです。

この信仰がなければ、わたしたちは罪の赦しを、復活の命を、救いの恵みを、受けることは出来ません。この信仰がなければ、わたしたちは試練や苦しみの中で、まことの助けを、慰めを、希望を得ることは出来ません。

すべては、罪に捕らわれ、悲惨の中にありながら、何もできない、無力なわたしたちを救うために、神さまがなさって下さったことなのです。

イエスさまのご降誕は、わたしたちを救うための、神さまの出来事。わたしたちのための、神さまの愛と憐みの御業なのです。

このイエスさまが、今日も、仲保者として、わたしたちと神さまとの間に立って下さり、わたしたちの罪を覆って下さっています。わたしたちのために執り成し祈り、わたしたちに神さまを礼拝する恵みを、これ以上ない益を、与えて下さっています。

「主は聖霊によってやどり、処女マリヤより生まれ」。このことに込められている素晴らしい恵みと益を、わたしたちは喜んで告白し、受け取りたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたの独り子イエスさまが、まことの人となり、低く降ってわたしたちと同じになり、わたしたちの罪を、さばきを、死を、その身に担って下さったことを、感謝いたします。

この方のゆえに、今わたしたちは罪を赦され、あなたの御前に出て、御言葉を聞き、賛美をし、礼拝をささげ、「父よ」と親しく祈ることがゆるされています。

この方のゆえに、わたしたちは試練に遭うときにも、イエスさまがすべてご存知でいて下さるといふ慰めを与えられ、イエスさまがご自分の苦難と死によって切り開いて下さった、救いと希望の道が備えられていることを、信じることができます。

どうか、神さまの救いの御業を信じさせて下さい。どうか、イエスさまの救いを受け入れさせて下さり、幸いな道を歩ませて下さい。

わたしたちの主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

【讚美歌】 248 「エッセイの根より」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 26 「グローリア、グローリア、グローリア」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン